

宮崎汎会員が見た世界の旅・第2部第11話

イエズス会のロヨラとザビエル

日本でもなじみ深いイエズス（イタリア語ではジェズ）教会をローマを訪ねた。

イエズス会は1534年8月15日キリスト教カトリック教会の男子修道会として創設された。

16世紀、反宗教改革運動を推進したことによってローマ法王パウロ3世が同会を公認した。当初は簡素な教会であったが、後次第に内部は絵画や彫刻などで装飾され、今日ではきらびやかな内陣となっている。

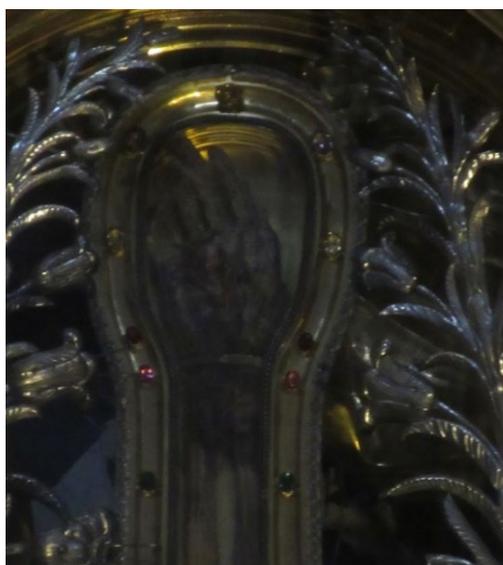


ジェズ教会（イエズス会本拠地）



イエズス会の紋章

教会の入口左側には、イエズス会創設者聖イグナティウス・ロペス・ディ・ロヨラ（1491年～1556年）の黄金色に輝く華やかな礼拝堂があり、右側にはロヨラの礼拝堂と向き合って日本人にもよく知られた宣教師・聖フランシスコ・ザビエル（1506年～1552年）の礼拝堂がある。ザビエルの礼拝堂には彼の右手がケースに収められ展示され、信者や観光客など多くの人が見入っている。イエズス会設立にはロヨラを筆頭にザビエルも創設者の一人として名を連ねている。



聖遺物・ザビエルの右腕

ザビエルはスペインのバスク地方の貴族の家柄に生まれ、長じてパリの宗教大学で哲学を専攻し学ぶ。この頃ロヨラから宗教について大きな影響を受けて、聖職者を目指すことになる。ロヨラをはじめとする志を同じくする7人がパリのモンマルトルの教会で生涯を神にささげる誓いを立てた。これが「モンマルトルの誓い」でイエズス会の創設となった。ザビエルの最初の赴任地は、当時ポルトガル領であったインドのゴアだった。

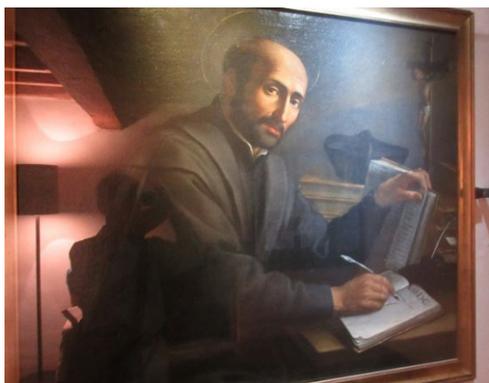
ザビエルは1549年（天文18年）、日本の薩摩半島の防津に上陸し平戸・山口・京都・堺などで布教活動を行い、キリスト教を日本にはじめて伝えた人物としてよく知られて

いる。因みに当時日本は室町幕府の時代であった。ザビエルは来日して3年目の1551年日本を去り、中国へ向かうも翌1552年中国で病を得て没し

た。遺骸はインドのゴアに運ばれゴアの教会に眠っている。

日本では2006年ザビエル生誕500年を記念し、ザビエルゆかりの地では様々な記念行事が行われ、ローマのイエズス教会に祀られている聖遺物であるザビエルの右手も日本へやってきた。

ロヨラはスペイン貴族で戦いに参加したのち、エルサレムへ巡礼しローマでイエズス会を立ち上げた。イエズス会はフランスで、ロヨラやザビエル等7名が「清貧・貞潔・聖地巡礼」の誓願を立ててスタートした。ロヨラはイエズス会の初代総長に選ばれた。イエズス会は教育と布教に熱心で、各地での活動はその土地の言葉や歴史を学び、地元根差した布教をおこなった。イエズス会の宣教師たちはアフリカからアジアへキリスト教を広めるため並々ならぬ努力をした。（2018年）



ロヨラ



ロヨラの臨終



ロヨラの執務室



直筆のサインの有る手紙



履きつぶされたロヨラの靴

参考 以下ローマのジェズ教会を訪ねた時の日記から抜粋（2018年6月2日）
ヴェネツィア宮殿を回り込むように、アスタッリ（ASTALLI）通りを百mほど進むと大きなジェズ教会に出る。先日来何度か前を通るがタイミングが悪くいつも締まっていたので、ぜひ見学したかったのである。入口から日本人の家族連れが出てきて目礼を交わす。

「ジェズ教会」は私達が（イエズス会）と言い習わして、日本人にもなじみが深いところである。教会は大きく中は豪華である。十六世紀に日本でも布教活動をして、その後中国で客死したフランシスコ・ザビエルもここに聖人として祭られている。

目を引くのが入口左奥にあるイエズス会の創設者である（イニャツィオ・ディ・ロヨラ）の黄金で装飾された大きな礼拝堂である。

対面のザビエルの礼拝堂も大きく立派である。きっと世界の未開の地に赴き、布教活動に命を捧げた多くの宣教師の中でも大きな功績のあった人なのだろう。仰天したのは、教会にいる多くの人がザビエルの礼拝堂前に集まり、一様に見上げカメラのフラッシュを光らせている。ロヨラよりも尊敬を集めているのかと勘違いしたが、近くによって行くと盛んに一点を指差しているグル

ープのリーダーがいる。

何気なく見ると黄金色の箱の上にガラスケースがあって、そこに手首が飾ってあるではないか。ガイドブックを見るとそれはザビエルの右手首である。改めてカメラに記録し、写真を拡大してみると大きな太い指が灰色に変色している。

私は歴史を知らないが、ひょっとしたらこの手は、織田信長や名だたる大名と握手を交わし多くの日本人に洗礼を与えたのかもしれないなどと勝手に想像を膨らませた。

そしてキリスト教ではこの手を見て尊いと感じるのか、それとも日本人を感じるちょっと異常で気味が悪いと思うのか考えさせられる。以前キリスト教の葬儀に出席した時、人間は天に召されて昇天するが、決して死は悲しむべきものでないと聞いたことがある。

ローマに来て随分沢山教会を見たが、ガラスの箱に死化粧して遺体を飾ってある場面をいくつか見たし、骸骨寺のように人骨を飾り物にして見せているところもあって、残酷とか気味が悪いとか怖いとかいう概念は日本人の持っている物とは少し違うのかもしれない。そんなことを考えるのは度し難い救いようのない罰当たりなのかなあ……………。

記録を書いていると連れ合いがやってきて、教会の隣の建物も見学できると耳打ちする“隣は何なの？”“判らない”入ってみようとジェズ教会を出る。

教会を出てぶらぶらしていると建物の扉が開き数名の観光客らしき一団が出てきたので覗くと係りが入りませんかと誘ってくれたという。さて蛇が出るか何が出るか男は度胸とばかり扉を押した。

入り口の若い学生のような男がにこにこして導きいれてくれる。パンフレットを手渡され文字を追うと(SANT・IGNAZIO・DE・LOYOLA)の文字を見つけた。

もしやして、ここは創設者ロヨラゆかりの博物館ではないかと入ることにした。入場料はとらないが寄付金入れらしき箱がある。

長い廊下を突き進む、中世の甲冑姿の肖像画がある。これがロヨラ？さらに廊下には中世の頃であろうかローマを俯瞰する地図が何枚も飾ってあり参考にカメラに収める。今度は僧衣姿のロヨラの肖像画である。甲冑姿の顔とウリ二つでロヨラであることが一目瞭然である。

木の扉をくぐると通路全体がフレスコ画に彩られ、窓ガラスも美しいステンドグラスに飾られた廊下が続き、突き当りは礼拝堂になっている。

一枚の絵がある。坊さんがベッドに横たわり周りを僧侶が取り巻き、祈り、聖書を読み上げている。横たわる坊さんの顔はロヨラである。これも騎士の顔と似ている。想像するにロヨラが天に召される図ではあるまいか。狭い部屋にやってきた。執務室であろうか机と時計の他何もない部屋で、天井は梁が剥きだしで真に殺風景な部屋である。

私室には擦り切れ、履きつぶされたスリパが置いてある。このほか白と黒の古びた僧衣、聖書、アイコンもある。見ていて自然になんと質素な生活を送った人なのであるかと当時に思いをはせる。ロヨラのデスマスクであろうか？唇が厚く眼光鋭く非常に意志の強そうな顔である。

自筆のサインのある手紙もある。実に几帳面なきれいな文字である。ロヨラの人物像が浮かびあがってくる。世界に布教するという強い使命を持ったイエズス会のリーダーとして君臨したロヨラの信仰の深さに打たれる。彼はスペインの貴族の出身であるようだ。

見学を終えて入口の箱に何がしかの喜捨をする。パンフレットを改めてみてみると、ここは平日

十六時から十八時まで、休日は十時～十二時だけのごく限られた時間の公開で、偶然見学できたのであった。